

写真が物語る

# 追憶の風景



▲根津磯の棧敷 昭和初期、大工で民宿を営んでいた故・神野米吉さん（中林町）が、北の脇海岸の沖合に浮かぶ根津磯に棧敷を建て、観光客をもてなした。これが、いわゆる「海の家」の前身といわれている。（撮影/昭和3年・提供/神野元さん）



▲蒲生田小学生による子亀の放流 蒲生田海岸は、日本のウミガメ研究の発祥地の一つで、昭和29年から60年以上にわたり毎年上陸・産卵調査を続けている世界で唯一の海岸である。（撮影/昭和44年・提供/蒲生田小学校）



▲桑野駅を出発する牟岐線最後のSL（蒸気機関車） 燃料を石炭から重油に転換し、車両の近代化を図るため、SLは、昭和45年3月31日で役目を終えた。（撮影/昭和45年3月31日・提供/西崎憲志さん）



▲踏切番 踏切には、列車が通過する時に遮断機を下ろしたりして安全を守る「踏切番」と呼ばれる駅員が立っていた。警報機が普及した現代では見られない懐かしい光景である。（撮影/昭和32年・提供/タカツ写真館）



▲椿川のシロウオ漁 2月から3月にかけて産卵のために遡上してくるシロウオを「四つ手網」ですくい上げる伝統漁法。椿町の春の風物詩。（撮影/昭和31年・提供/県立文書館）



▲岩脇公園桜馬場 那賀川堤防から妙見山の麓まで、約150メートルの桜並木が続く岩脇公園の玄関口。馬場では、明治末期まで競馬が行われていた。（提供/県立文書館）



▲北の脇海水浴場 海水浴シーズンには、浜辺が人で埋め尽くされるほどにぎわっていた。バスは臨時便が運行し、パチンコ台まで設置されていた。（撮影/昭和30年代中期）



▲伊島のおしごく 江戸時代に始まり昭和35年まで行われていた、5月5日の弁天祭の恒例行事。6人の若者が櫓を漕ぎ、500メートル先の紅白のブイを回って船足を競った。島民は堤防から声のかぎり応援し、島は熱気に包まれた。（撮影/昭和30年代初期・提供/岡本新三郎さん）

誕生から60年の時を経た阿南市。  
ふるさとの景色はどのように姿を変えてきたのでしょうか。  
すっかり変わってしまった風景、今も変わらない風景、  
そして、ずっと残しておきたい風景…。  
市制施行60周年記念事業「お宝発掘プロジェクト」で  
寄せられた懐かしの写真の中から、いくつかを紹介し、  
人々の暮らしやまちの姿の変遷をたどります。

